

戦後教育改革期 IFEL の示唆した幼稚園カリキュラム開発

Early Childhood Curriculum Development Suggested by the IFEL
in the Post-War Education Reform Period

小尾麻希子*

OBI, Makiko*

要旨

本研究は、教育指導者を対象とした戦後最大規模の講習会「教育指導者講習」(IFEL)の第5期・第6期に開催された幼稚園教育班・幼年教育班の講習内容の中から、幼稚園のカリキュラムに関する内容に焦点を当て、IFEL がわが国の幼稚園カリキュラムの開発にどのような示唆を与えたのかを明らかにすることを目的としたものである。研究の結果、IFEL の示唆した点は、第1に、カリキュラム開発の基礎となる子どもの発達のアウトラインとその発達の特徴について理解すること、第2に、子どもの実際の姿に基づいた実証的・実践的な研究の実施、第3に、幼稚園・保育所・小学校低学年の一貫した幼年教育カリキュラムの開発、第4に、日本の子どもに必要な教育の目標の選定とその達成に向かう望ましい経験内容の解明、第5に、子どもの生活に立脚した経験内容の組織と目的活動を中心とした一日の生活の構築にあった。この目的活動を中心とした生活は、自由遊びを基調とした「保育要領」の趣旨と相違するものであることを指摘した。

1. はじめに

本研究は、「教育指導者講習」(the Institute For Educational Leadership: 以下 IFEL と略記)の第5期・第6期に開催された幼稚園教育班・幼年教育班の講習内容の中から、とりわけ、幼稚園のカリキュラムに関する内容に焦点を当て、IFEL がわが国の幼稚園カリキュラムの開発にどのような示唆を与えたのかを明らかにすることを目的としたものである。

IFEL はアメリカの民間情報教育局 CIE の強いリーダーシップによって開始され、日本語名称を「教育長等講習」、後に「教育指導者講習」として、1948年10月から1952年12月までの全9期の会期で開催された、教育指導者を対象とした戦後最大規模の講習会である。講習期間の多くは6週間からあるいは12週間という長期におよぶものであり、受講者は約1万人にのぼった。この講習会は、教育の民主化という戦後日本の教育改革における占領軍の主要目的を達成するために、CIE が最も力を注いだ施策の一つであり、教員養成や現職教員の再教育を担う指導者の養成を目的としたものである。各都道府県や各大学から選ばれた教育界のリーダーが受講生として参加した。IFEL 開催にあたって、CIE は、日本人講師とともにアメリカから多くの教育学者、教育実践家、教育行政官を招き、受講者にアメリカの教育学及び教育行政・学校管理の理論と実務を学ばせた。その講習方式はワークショップによるグループ研究を主軸としたものであり、また、研究活動は講師を含む全てのメンバーの討論・協議によって進められた⁽¹⁾。IFEL の目的は実証的・実践的な教育学研究を日本に根付かせるとともに、受講生らに自主的で民主的な生活様式を体得させることにもあったのである⁽²⁾。

以上のように、IFEL は戦後日本の教育改革における一大プロジェクトであったが、その重要性に比べて、研究論文の数は少ない。たとえば、戦後日本の教師教育改革や教育学教員再教育という立場からその講習の全体像を示したものとしては、高橋(1994)⁽³⁾や平田宗史・平田トシ子(1995)⁽⁴⁾などがある。また、近年では、国語教育の教育課程及び教授法に焦点を当てた坂口(2001)⁽⁵⁾、家庭科教育の立場から論じた柴(2001)⁽⁶⁾など、特定分野に焦点を当てた研究も蓄積されてきた。本研究で取り上げる幼稚園教育班・幼年教育班を対象とした研究論文としては、大岡(2010)⁽⁷⁾、大岡(2012)⁽⁸⁾、後藤(2017)⁽⁹⁾の3編がある。ただし、本研究で取り上げようとするカリキュラムに関する研究に焦点を当てたものとなると、大岡(2010)の1編のみである。

大岡(2010)の論文では、第5期及び第6期の研究成果をまとめた『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』(1951)に基づいて、受講生らの進めた幼年教育のカリキュラムに関する研究内容について紹介され、その研究の特徴として、「『保育要領』で示されている児童中心主義の理念のもと、経験を重視した柔軟性のあるカリキュラムが求められていた」ことや、「幼年教育という用語が示すように幼児段階にとどまらない、その後の子どもの発達を連続的に捉えることができるカリキュラムの構成を試みようとした」点が挙げられている⁽¹⁰⁾。ただし、第5期の受講生らの作成した『幼稚園教育研究集録』(1950)によれば、この研究班で研究されたのは幼稚園教育を対象としたものであり、第5期の段階では3歳から8歳までの子どもを対象とした幼年期の教育が構想されるには至っていない⁽¹¹⁾。幼稚園教育班・幼年教育班において受講生らの進めたカリキュラ

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

ムに関する研究については、第5期に研究された内容を解明するとともに、第5期の幼稚園教育を対象としたカリキュラムから第6期の幼年教育のカリキュラムに関する研究へと遷り変わっていった経緯を明らかにすることが求められる。また、大岡によれば、同講習会においては、「保育要領」と通底する児童中心主義の理念のもと、「経験重視した柔軟性のあるカリキュラム」が求められていたと結論づけられているが、そこで重視された経験やその経験を組織して作られるカリキュラムがどのような特質をもつものであったのかは疑問として残される。

そこで、本研究では、第1に、先行研究では取り上げられてはこなかった、お茶の水女子大学附属幼稚園所蔵の第5期の研究集録『幼稚園教育研究集録』及びこの研究班の活動についてアメリカ人講師 G. M.ルイス (G. M. Lewis) が2週間ごとに作成し、CIEに提出した第5期の報告書 Bi-Weekly Report of IFEL Activities, 講師の周郷博が中心となって結成した IFEL 幼年教育研究会刊行の雑誌『幼年教育 No 2』(1952)を用いて、第5期に進められた研究内容及び第6期に幼年教育が構想された経緯について論じる。第2に、第5期・第6期の研究成果をまとめた研究集録『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』及びルイスによる第6期の報告書 Bi-Weekly Report of IFEL Activities を用いて、第6期に進められた研究の中から、幼稚園のカリキュラムに関する研究内容に焦点を当てて論じる。第3に、受講生らの研究成果として示された幼稚園のカリキュラムと CIE の関与のもと、文部省より 1948 年に刊行された「保育要領—幼児教育の手びき—」(試案)とを比較し、IFEL がわが国の幼稚園カリキュラムの開発にどのような示唆を与えたのかについて論じていくこととする。

2. IFEL 第5期開催の幼稚園教育班における研究の概況

(1) 幼稚園教育班の目的

IFEL 第5期開催の幼稚園教育班は、お茶の水女子大学附属幼稚園を会場として 1950 年9月から 12 月までの会期で開催された。受講生は表1に示したとおり、各都道府県の選考委員会より選抜された幼稚園教員 10 名・教育委員会関係者 7 名・教員養成機関関係者 1 名・小学校教員 1 名の 19 名であった。この講習会の講師を務めたのは、アメリカ教育省のルイスと日本側の主任講師であるお茶の水女子大学教授の周郷博であった。その他、東京家政大学教授の山下俊郎がアドバイザーとして携わり、お茶の水女子大学教授の牛島義友、戸倉ハル、助教授の平井信義、会場校のお茶の水女子大学附属幼稚園園長及川ふみらも講師を務めた。通訳を務めたのは文部省学術局の下牧英子であった⁽¹²⁾。

第5期の Bi-Weekly Report of IFEL Activities によれば、幼稚園教育班における研究の目的は、わが国の子どもに必要な教育(目標)とその達成に向かう方法について明らかにすることにあつた。この目的を達成するためにまず必要とされたのは、日本の子どもの発達に関する研究を進めることであつた⁽¹³⁾。ルイスは「幼児教育にたずさわる人々がもたなければならない

子供についての理解は日本の子供についての事実をもとにした成長と発達の理解でなければならない」と説き、わが国の子どもの発達に関する研究をこの講習会の基盤に据えたのである⁽¹⁴⁾。ただし、集積された教育書の中で、日本の子どもの発達に関することを記載したものは僅かであり、受講生らによる調査・研究を必要とした。そこで、受講生らは、「観察は幼児研究の第一歩である」と説いたルイスの指導のもと、お茶の水女子大学附属幼稚園において幼児を観察し、実際の幼児の姿に基づいた「幼児の研究」に着手していったのである⁽¹⁵⁾。

研究を進めていくにあたって、幼稚園教育班では5つの研究グループが編制され、午前中の講習は、この研究グループで同附属幼稚園における幼児の観察と記録、観察結果の分析、議論(クラス全体での議論を含む)などを行った。午後からの講習の中心は、講師による講義や音楽リズムの実技などであった。そこでの講義のほとんどは議論の形を採って行われ、ルイスは受講生らの積極的な思考と批判を誘い、議論を通して学ぶことを奨励した。その他、この研究班では、週に一度は東京都内の幼稚園やアメリカンスクールを訪れて教育の実態を観察し、関係者らとの議論を重ねた。なお、ルイスは、この研究班の講習の目的として、幼児教育における教師・管理者・監督者のトレーニングに適したコンテンツを開発すること及びこれらの目的に迫る研究を民主的な方法で進めていく技術を受講生自らが獲得していくことを掲げていたという⁽¹⁶⁾。

表1 第5期 IFEL 幼稚園教育班参加者一覧¹

氏名	勤務先・役職名・所在地
古屋 彰	富士川幼稚園園主兼主事 (山梨県)
高森 豊	熊本市立五福幼稚園園長 (熊本県)
飯田 英雄	宮崎大学附属小学校教諭 (宮崎県)
岩佐 崇子	徳島大学徳島師範学校附属幼稚園主任教諭 (徳島県)
梶谷 岩雄	平田町立平田小学校校長・幼稚園園長 (鳥根県)
内藤 時光	広島県教育委員会事務局学事課専門職員 (広島県)
上野 塩	聖和女子短期大学講師 (兵庫県)
清水 桔梗	大阪市教育委員会事務局指導主事 (大阪府)
中西ヒサノ	京都市立乾隆幼稚園園長 (京都府)
大橋 和子	奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属幼稚園教諭 (奈良県)
山口 たつ	愛知学芸大学附属幼稚園教諭 (愛知県)
稲住清左衛門	三重県教育委員会事務局指導主事 (三重県)
小河 洋	静岡県教育委員会指導課教諭指導嘱託 (静岡県)
山村 きよ	東京都教育委員会指導部教諭 (東京都)
友松 秀子	埼玉大学埼玉師範学校附属幼稚園教諭 (埼玉県)
今泉 静江	栃木県教育委員会事務局指導主事 (栃木県)
松村伊佐武	福井大学福井師範学校附属幼稚園副園長 (福井県)
富所 忠雄	青森県教育委員会主事 (青森県)
田村 澄	藤幼稚園主任教諭 (北海道)

(2) 子どもに必要な教育とお茶の水女子大学附属幼稚園における幼児の観察に基づいた受講生らの研究

① 子どもに必要な教育—幼稚園教育における「指導目標」—

『幼稚園教育研究集録』の「第一章 幼稚園教育の目標」によれば、幼稚園教育班の研究は、幼児期が心身の諸側面の発達が著しい時期であることに着目し、この子ども自らが伸びようとする機会を生かして、その発達がよりよく伸長されるように

導くという指導観を根底に据えたものであった。この指導観に基づいて、受講生らは「健康」（身体的発達）・「幸福」（情緒的発達）・「社会参加」（社会性の発達）・「知的発達」の側面より、当時の日本の子どもに必要とする教育（目標）について考え、議論を積み重ねた。その結果、日本の幼稚園がもつ目標として、「子供をできるだけ健康にするよう援助すること」、「安定感と成長感を与え、子供の幸福を増進させること」、「グループの中で生活することを学ぶよう子供を援けること」、「子供たちが興味あることをすることにより学んで行くよう導くこと」という4つの「指導目標」が掲げられた⁽¹⁷⁾。

②お茶の水女子大学附属幼稚園における幼児の観察

お茶の水女子大学附属幼稚園における幼児の観察は、「正確で科学的な観察が必要」と説いたルイスの指導のもと、「観察者の主観や想像を交えないで、子供のありのままの姿（行動、言語、運動、表情等）を精細に観察」し、記録するという原則に沿って行われた。観察は同附属幼稚園に在籍する3歳児・4歳児・5歳児（3歳から6歳まで）の全ての学年を対象とし、各研究グループにおいて数名の子どもを抽出するとともに、性別や年齢別による観察も行われ、日時、場所を変えつつ継続的に実施された。観察は10分または20分単位で行われ、一定の時間を挟んで再び観察・記録するというものであった。観察結果の分析にあたっては、記録した子どもの姿の中から、まず、連続して見受けられる事柄・反復して表れる事柄・共通した事柄が取り上げられ、さらに、それらを身体的・言語及び社会性・知的・情緒的発達の側面より分類していくという方法が採られた⁽¹⁸⁾。なお、この幼児の観察に基づいた研究の成果は、第5期及び第6期の研究成果をまとめた『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』に掲載されるに至っている。

③観察より明らかにされた幼児の興味とその発達的特徴

Bi-Weekly Report of IFEL Activitiesによれば、幼稚園教育班では、以上に記した幼児の発達に関する研究に加えて、子どもの興味とその発達的特徴に焦点を当てた観察がお茶の水女子大学附属幼稚園において行われた⁽¹⁹⁾。その観察の結果は、先に掲げた幼稚園の「指導目標」に沿って、「日本の子供たちはどんな運動を好むか」、「幸福感は何によって得られるのか」、「子供たちはどのように集団に参加して行くか」、「子供たちはどんなことに興味を持つか」の4つの観点より整理されるに至った⁽²⁰⁾。子どもの興味とその発達的特徴として、以下のことが明らかにされている。

第1の観点である「日本の子供たちはどんな運動を好むか」は、観察した事例に基づいて、3歳から6歳までの各年齢の子どもが興味を示す運動やその運動の中に見られる動きの特徴について示された。子どもの健康は様々な側面から捉えられるが、この研究では運動の側面に焦点を当てたとしている。たとえば、3歳では物をつかんで入れる運動や跳ぶことに最も興味を示し、4歳になると、大筋肉の運動（遊具を使った遊び・跳

ぶ・スキップ・走る）を好むようになり、5歳では手先や指先を使った運動に興味をもつようになる。6歳になると、4歳と同様に遊具で遊ぶ・投げる・跳ぶ・登る・走るなどの大筋肉を使った遊びに興味を示すが、4歳よりも動作が速く、継続時間も長くなり、巧みさも増してくるなどである⁽²¹⁾。

第2の観点である「幸福感は何によって得られるのか」は、子どもの幸福感は安定した情緒のもとに満たされるという考えに基づいて、子どもの情緒がどのような状況で安定していくのかを日々の生活の中に見られる子どもの「心の状態」に着目しつつ提示された。ここでは、子どもの情緒が安定していくのは「認められたい愛されたい心」や「やってみたい心、満足されたい心」、「美しさ（又いたわる可愛がる）を愛する心」、「うたったり、ダンスや遊戯をしたい心」、「知りたい心」などが満たされる状況にあるときであるという結論とその発達の特徴が各年齢の事例に基づいて示されている⁽²²⁾。

第3の観点である「子供たちはどのように集団生活に参加して行くか」は、遊びの中における子どもの対人関係（他の子どもとの交渉の仕方）・協力・自己主張・会話・社会的行動・言葉の側面に焦点を当て、子どもが集団生活に参加していく状況及びそこでの発達の特徴について明らかにされた。たとえば、対人関係では、3歳の子ども同士の交渉は対一で行われることが多く、4歳になると、2人から3人で遊ぶ姿も多く見受けられるようになる。4歳は遊具を媒介として他者とつながっていくことが多いが、遊びが継続されるには教師の仲立ちが必要とされる時期でもある。5歳では子ども同士の親密度が増すとともに、見通しをもちながら役割を決めて遊ぶことも多くなる。6歳では遊びの構成員が増え、目的に向かって協力して遊びを進めるようにもなってくるなどである⁽²³⁾。

第4の観点である「子供たちはどんなことに興味を持つか」は、遊びの中における子どもの興味（興味を示す活動）と行動の特徴について明らかにされた。この各年齢の興味と行動の特徴についてまとめた一覧表では、興味として年齢ごとに7から20の活動が、行動の特徴として7から12の子どもの行動が挙げられている。たとえば、3歳の興味として挙げられているのは、「砂場で木の車を押して遊ぶ」、「家族の人達の動作をまねる」などであり、行動の特徴としては、「遊びが断続する（27分間に12回）」、「言葉と動作のくり返しを喜ぶ」などである。また、この研究では、ままごと遊び・砂場での遊び・描いたり作ったりする遊びについては重点的な観察がなされ、同研究集録にはそれらの遊びに関する事例が掲載されている⁽²⁴⁾。カリキュラムに組織していく経験内容を子どもの興味や発達の特徴に即して考えていくことを示唆したのである。

以上の幼稚園教育班の研究をまとめた『幼稚園教育研究集録』は82頁にわたって記載されたものであり、その構成は「第一章 幼稚園教育の目標」、「第二章 幼児の研究—日本の子供について」、「第三章 幼児の発達について—発達のアウトライン」、「第四章 幼稚園のカリキュラム」、「第五章 幼稚園の教師」、「第六章 幼稚園教育の管理」となっている。そのうち、

幼児の観察に基づいた「第二章 幼児の研究—日本の子供について」は45頁におよんで、国内外の文献を参照しつつ作成された「第三章 幼児の発達について—発達のアウトライン」は15頁にわたって記載されている。この研究集録の構成からも、受講生らの研究の主軸が子どもの発達に関する研究にあったことが明らかである。なお、「第四章 幼稚園のカリキュラム」は、「望ましい幼稚園の一日」及び「幼稚園で必要と思われる教具、教材」について記されたものである⁽²⁵⁾。

3. IFEL 第6期開催の幼年教育班における研究の概況

(1) 幼年教育を構想した経緯

第5期幼稚園教育班に続き、IFEL 第6期開催の幼年教育班は5期と同様に、お茶の水女子大学附属幼稚園を会場として、1951年1月から3月までの12週間の会期で開催された。受講生は表2に示したとおり、都道府県より選抜された幼稚園教員8名、教員養成大学教員2名、高等学校教員1名、教育委員会関係者5名、小学校教員1名の17名であった。講師は第5期より引き続いてルイスと周郷、それに第6期からは功刀嘉子が兼任講師を務めた。アドバイザーを務めたのは引き続き山下、通訳は下牧であった⁽²⁶⁾。

第6期の講習では、第5期に進められた幼稚園の教育だけでなく、保育所を含めた3歳から小学校低学年の8歳までの幼年教育を構想して研究が進められた。『幼年教育 No.2』において、受講生であったお茶の水女子大学附属幼稚園教諭の菊池ふじのが回顧しているように、幼年教育を構想するに至ったのは、講師のルイスからの示唆によるところが大きい。開講当初、ルイスは「私が日本にきて調べてみてわかったのであるが、日本では幼稚園と小学校とははつきりと分かれていて、その教育の内容などについてもあまり連絡がとられていないようであるが、これをどう思うか」と、日本の教育の現状について、問題を提起した。また、ルイスは、アメリカでは3歳から4歳までを対象としたナーセリーから5歳児を対象とした幼稚園、そして、小学校3年生までを一団として“Early Childhood

Education”（幼年教育）と呼ぶこと、ゆえに、幼稚園の教員は保育所ないしは小学校低学年の教員にもなり得る資格を有していること、実際にそれらの教員の人事的交流がなされていることなど、アメリカの教員養成の現状についても語ったという。このルイスの発言を受けた受講生らは、幼児期から児童期前期へと移行する子どもの生活や心理学的見地をも踏まえて議論を重ね、その結果、わが国においても3歳から8歳までの一貫した教育が必要とされるという結論を得るに至ったのである。なお、この時期の教育の名称については、「幼年教育」とするのが適切であるとの結論に至り、IFEL 第6期開催の“Early Childhood Education”としたセクションは、「幼年教育班」と称されることとなったのである⁽²⁷⁾。

なお、第6期のBi-Weekly Report of IFEL Activitiesによれば、この研究班で構想された幼年教育は、幼稚園・保育所と小学校低学年の教育とを一貫した教育を意味するものだけでなく、幼稚園と保育所の一体化をも包含して考えられた⁽²⁸⁾。民主的な社会を目指す戦後日本において子どもに必要とされるのは、保育所による「保護」(care)と幼稚園における「教育」ではなく、幼稚園と保育所の一体化を図り、そこで「保護」と「教育」とが一体となった幼年期の教育が実践されることであると考えられたのである。

(2) 幼年教育班における研究のテーマ

受講生らによる議論を経て決定された幼年教育班における研究のテーマは、「幼年教育の必要及び目標」、「幼年教育のカリキュラム」、「幼年教育のための教師の養成」、「幼年教育のための行政、管理・組織」の4つであった。なお、第5期に進められた「幼児の研究（観察の仕方、記録のとり方など）」は、教師の心得ておかなければならない、いわば教員養成大学のカリキュラムに位置づけられる問題として、教師の養成に関する研究に含め、「幼児の成長発達」は、カリキュラムをつくる上で教師が理解しておかなければならない基礎的事項として、カリキュラムに関する研究に含められることとなった⁽²⁹⁾。そこで、受講生らは研究のテーマに沿って4つの研究グループを編制して調査や資料収集にあたった。講師は受講生らの必要に応じてサゼッションを行い、グループ研究の結果は、逐次、幼年教育班全体へ報告されたという⁽³⁰⁾。

Bi-Weekly Report of IFEL Activitiesにおけるルイスの報告によれば、幼年教育班では、わが国の幼児の教育や教員養成、行政等の場において活用される「ハンドブック」（研究集録）の作成を講習会の重大な目的として掲げていた。そのため、第7週目から第12週目の講習に至る期間は、受講生らによる研究集録の執筆と講師によるコンサルティングに充足されている。第5期に作成された『幼稚園教育研究集録』は暫定的なものとして考えられていたため、第6期においては、第5期・第6期の研究成果をまとめた研究集録の作成を研究の一環として位置づけたのである⁽³¹⁾。その研究集録として刊行されるに至った『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』は、

表2 第6期 IFEL 幼年教育班参加者一覧²

氏名	勤務先・役職名・所在地
渡辺 俊枝	千葉大学教育学部附属幼稚園教諭 (千葉県)
石元 安幸	高知県教育委員会指導主事 (高知県)
水野 節	富山県教育委員会学校教育課主事 (富山県)
増田 妙子	岡山県教育委員会指導課教育主事 (岡山県)
八木 シヅ	熊本大学教育学部附属幼稚園教諭 (熊本県)
角尾 稔	東京学芸大学助手 (東京都)
井上ハル子	福岡県教育委員会指導課視学委員 (福岡県)
本多 玄洲	こゆるぎ幼稚園園長 (神奈川県)
小田 眞子	大分県教育委員会主事 (大分県)
水野 清孝	新潟県立新潟中央高等学校 (新潟県)
菊池フジノ	お茶の水女子大学附属幼稚園教諭 (東京都)
遠藤 君	頤栄短期大学助教 (兵庫県)
渡部 葉子	秋田大学教育学部附属幼稚園教諭 (秋田県)
遠藤 孝子	堺市立第三幼稚園園長 (大阪府)
野村 ウメ	徳山市立夜市小学校校長 (山口県)
北條 はる	鳥取県立鳥取西高等学校附属久松幼稚園教諭 (鳥取県)
深堀 久子	長崎純心幼稚園教諭 (長崎県)

261 頁にわたって記載されたものであり、その構成は「第一章 幼年の保護及び教育の必要」、「第二章 カリキュラム」、「第三章 幼年教育のための教師の養成」、「第四章 幼年教育のための行政、管理及び組織」、「第五章 幼児の発達」となっている。このうち、「第五章 幼児の発達」は、第5期に作成された『幼稚園教育研究集録』の「第二章 幼児の研究—日本の子供について」及び「第三章 幼児の発達について—発達のアウトライン」を採録したものである⁽³²⁾。幼年教育班における受講生の研究は、第5期の幼児の発達に関する研究を基盤として進められたものであった。

以上の第6期に進められた研究の中から、カリキュラムに焦点を当てて、以下に論じていくこととする。

4. 幼年教育班におけるカリキュラムに関する研究

(1) 幼年教育の必要性と目標

第5期・第6期開催の IFEL に おける受講生らの研究は、全ての人々が幸福な生活を送り、一人一人の人権が尊重された民主的な社会をつくるという理念に基づいて進められたものであった。ゆえに、幼年期の教育は、民主的な社会を実現する上で欠かせない子どもの人権尊重と、子ども一人一人の「健康」、「幸福」、「社会参加」、「知的発達」を援ける「保護」と「教育」に資する重要なものであるとした。また、民主的な社会の形成に必要とされる人々の態度や習慣、価値観の形成には「長い時間が必要であり、長期にわたる計画と一人一人の忍耐が要求され」として、幼児期から小学校低学年までの教育を見通した一貫性のある幼年教育を求めた⁽³³⁾。

そこで、幼年教育の目標に関する研究では、まず、わが国の子どもに必要であると考えられる種々の目標が受講生らによって提示された。議論を通して検討された結果、日本の社会において最も緊要とされる目標として、子どもの「健康（身体の発達）」、「幸福（情緒の発達）」、「社会参加（社会性の発達）」、「知的発達」の側面から捉えた種々の「指導目標」が提示されるに至った。この研究では、人々が健康で幸福に暮らせるような民主的な社会を実現する上で基盤となるのは、幼年期における健康な生活リズム及び基本的な生活習慣の確立、身体の発達段階に応じた自由な活動、安定した情緒のもとで得られる満足感や自信、表現することの喜びなどであると考えられ、その身体的・情緒的発達を援ける教師の保護（環境整備を含む）・指導の方向性が「指導目標」として示された。また、民主的な社会を実現し、世界の自由平和国家の一員として立っていくためには、社会性や自分で物事をやり遂げたり子ども同士で問題解決したりする力、興味に基づいた生活や遊びの深化、簡単な道具や材料を用いた思考と理解、自分の考えを表現する言語的側面の発達、自由に創造する力などの知的発達が必要であると考えられ、社会性の発達や知的発達を援ける保護及び指導の方向性が「指導目標」として示されるに至ったのである⁽³⁴⁾。

(2) カリキュラムに組織される経験内容

カリキュラムに関する受講生らの研究は、子どもの成長発達には子どもの伸びようとする力と子どもを取り巻く環境とが一つとなっていく過程に生み出されるものという発達観を根底に据えて進められたものである。ゆえに、環境と深く結びついた子どもの生活経験を重要なものとして捉え、カリキュラムは「子供の成長発達をたすけ、子供を幸福にするために、適当な生活経験をさせるように計画したもの」として位置づけられた。その作成にあたっては、子どもの心身の発達段階やその個人差、社会の要求に相応した経験内容を組織しなければならないとした⁽³⁵⁾。

『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』の巻末に掲載の第6期の研究において参照された文献一覧から分かるように、このカリキュラムに関する研究を進めるにあたって、受講生らはカリキュラムに関する国内外の数多くの文献を参照した⁽³⁶⁾。また、Bi-Weekly Report of IFEL Activities によれば、受講生らは東京都内の幼稚園やアメリカンスクール、保育所、小学校を訪れて教育の実際を見学し、関係者と盛んな議論を交わした。その中でも、特に、幼稚園から小学校第3学年までの一貫した教育を見学した代々木のアメリカンスクールについては「カリキュラム研究のよい出発点となった」と報告されている⁽³⁷⁾。

参考文献や教育の実際からの示唆、さらには、研究グループや幼年教育班全体での議論を経て、幼年教育班では、幼年期の子どもに必要とされ、望ましいと考えられる経験として、「1 身体検査（入園、入学前の検査・毎月の検査）」、「2 運動と休息（大筋肉を使った遊び・小筋肉を使った遊び）」、「3 生活の習慣（自立の習慣・きまりを守る習慣・グループに参加する経験）」、「4 科学の経験（動物飼育・植物栽培・自然の観察・機械や器具の観察）」、「5 数量」、「6 言語」、「7 絵画製作」、「8 リズムと音楽」、「9 ごっこ遊び」、「10 劇遊び」、「11 見学」、「12 行事」、「13 環境（教師・建物と設備）」、「14 より広い日常生活のさせ方」の14項目を掲げるに至った。ただし、「13 環境」は経験ではなく、子どもを取り巻く環境としての教師や建物・設備などに関して述べられたものであることから、実質的に示されたのは13項目である。なお、これらの経験は「実際の経験の場に於いては、すべての経験が総合的に取り扱われる」としている⁽³⁸⁾。この経験を総合的に取扱うということについて、たとえば、『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』、「第三章 カリキュラム」、「第三節 どのような経験をさせたらよいか」では、以下のような事例が示されている。

表3は、「リズムと音楽」の項に掲載された事例「つみ草」である。これは、教師の歌う「つみ草」の歌に関心を寄せ、実際に摘み草に行ってみたいという子どもの興味と要求を出発点として、子どもの多様な生活経験を創出していった事例である。教師の歌を聴き、摘み草に行ってみたいと思った子どもの興味や要求は、やがて、摘み草に出かける計画についての話し合いや必要な物の制作へ、さらに、歌を歌いながら摘み草をした経験は、絵や動き、音楽などの多様な表現活動へと深められ

るに至った。こうした経験をこの実践事例では、「多面的な生活経験」と表現している⁽³⁹⁾。

表3 事例「つみ草」³

或る日、教師が「つみ草」の曲を歌ってきかせた。子供達もつみ草に行きたいと云い出した。そこで次のような生活が展開された。

- ①計画 どの辺りの野原へ行くか。どの道を通ろうか。
- ②摘み草に使うかこをつくる。
- ③摘み草をする。歌いながら摘む。
- ④思い出の話をしたり、絵にかいて遊ぶ。
- ⑤つみ草の遊びを動きで表現する。
- ⑥楽隊遊び(リズムバンド)をする。

動きの表現では蝶になる子供、草をつむ子供になって楽しかった遊びを床や庭に出て表現する。歌によって動かされた子供は多面的な生活経験をしたわけである。

(下線は筆者にて作成・文中表記は原文のままとした)

次に、表4は、先の事例と同様に、「リズムと音楽」の項に掲載された事例「リズムバンド」である。これは、音楽を通した子どもの自由な表現から「リズム、拍子、和音、メロディー」という音楽の特徴的な要素までを見通して、子どもの生活経験を立案した事例である。「指導順序をつけてしめすと次のようになる」と記されているように、多様な生活経験は、子どもの興味や要求に基づいた生活の中に、目標に迫るより豊かな経験を織り込んでいく教師の援助・指導を据えて実現されるものであると考えられたのである。経験を総合的に取り扱うとは、単に、経験内容の相互関連を意図したものではなく、子どもの興味を出発点とした生活の中に目標の達成へと向かう経験を位置づけていくことを趣旨としたものであった⁽⁴⁰⁾。

表4 事例「リズムバンド」⁴

子供はうたつたり、曲をきいて手や首や頭を動かしたりする。興味にのると彼らは全身を動かす。なだらかな運動こうつる。この自然な表現こそ心のありのままの姿であり、動くことによつて彼らは楽しむのである。おどりたい、歌ひたい気持ちを充分表現させたい。(中略) リズム、拍子、和音、メロディーは音楽のもつ要素であるから、かたよらないで上手にプログラムの中に織り込んで行きたい。子供の表現ではリズムバンドを演奏させる遊びもある。これには主として打楽器を使用させる。教師が曲を伴奏して子供がリズムを打つのである。太鼓、シンバル、タンバリン、カスタネット、トライアングル、鈴、笛、シロホンなどで、この指導順序をつけてしめすと次のようになる。

- ①楽器の音色をききわける。
- ②思うまゝにたゞいたりふつて見させる。
- ③楽器のもち方、ならし方を学ばせる。
- ④曲に合わせて思うようにならしてみる。
(子供のよく知っている曲に合せて)
- ⑤リズム打ちを経験させる。
上手に出来なくともよい。努力して態度の成長するのが望ましい。
- ⑥同種類のものでリズム打ちをしてよく曲に合せて揃うように注意させる。
- ⑦5、6人の子供に思い思いの楽器をえらびとらせて練習させる。
- ⑧ちがう楽器を加えて前のものと音の感じをくらべてみる。
- ⑨5、6人のグループを1組として交替して遊ばせる。
- ⑩教師は編曲を用意して、演奏させる。
自分の演奏部位をよく理解するように導く。
- ⑪正しい姿勢を保つ。

(下線は筆者にて作成・文中表記は原文のままとした)

なお、「よりひろい日常生活のさせ方」の項では、子どもに必要とされ、望ましいとされる経験の場が日常の生活の様々な場面にあるという趣旨から次のように述べられている。たとえば、日常生活の中で、子どもが釘を打つことに興味をもった時、

「子供はどのようにしたら、まっすぐに釘を打つことが出来るか工夫する。ここではじめて釘を打つことが目的を持った、努力を伴った価値ある経験となる」と、日常生活の中で、子どもが興味をもって取り組み始めた一つの経験がその子どもの成長へとつながる「価値ある経験」となっていく過程を望ましい経験として捉えたのである⁽⁴¹⁾。

(3) 幼稚園における「一日のプログラム」

幼年教育班のカリキュラムに関する研究の成果として、『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』の「第四節 一日

表5 幼稚園の一日のプログラム(一部抜粋)⁵

- (1) 朝の準備 (8:00~8:30) (略)
- (2) 朝の視診 (8:30~9:00) (略)
- (3) 自由あそび (9:00~9:30)
視診の済んだ子供達を園庭で自由にあそぶ。早春の日を浴びてままごと遊びをしている子供達。三輪車の遊びが出来て汽車ごっこえ発展する。お砂場では大きなお山の作り比べから川が切られ、水を運ぶ者、線路を敷く者と子供達は構成あそびに余念がない。
芝生にはうさぎをとりまいた子供達が兎の好む草を取ってきてはやっている。自由遊びは子供が自分で好きなグループを作り、好きな遊びを選び取つてするので子供達の自発活動は、生き生きと伸ばされて行く。教師は子供達の一人一人をよく観察しよう。
- (4) お片付け (9:30~9:50) (略)
- (5) お八つ (9:50~10:20) (略)
- (6) お仕事 (10:20~11:20)
1. 話し合い 朝の自由あそびについて、又社会で、家庭であつた子供に興味ある事についても問題が出る。今日の計画について話し合おう。昨日した三匹の子豚の「劇あそび」が大変面白かつたから豚の面をつくつて、今度する時に使ふとよいと云うことから劇に入るバックも作り度い。お家も作り度いと話は発展し、それぞれの仕事の分担をきめる。何で作るか考へる。
2. 製作 作るものによつてグループに分かれる。バックを描く子供達は大きな紙を黒板に貼り、一人の子供がチェアマンとなつて、どんな絵を描くか、誰が何を描くか、と相談している。お家をつくるもの、お面をつくるものもそれぞれに分かれて仕事を始めた。教師は各グループをまはりながら、子供達の相談に乗つたり、助言をしたりする。折角の子供達の興味が途中でくじけることのない様、はげましたり、又子供の手には合はぬ様な所は、手助けしてやろう。この様な大きな計画は一日で完成しなくてよいと思う。短い時間でも協力して真剣に仕事をする態度を養い度い。(後略)
3. 話し合い 今日した仕事について話し合う。グループで作つたバック、子豚の家三軒等持ちよつて、子供達を中心として、評価する。豚の家に窓をつけたらよい、赤い煉瓦の煙突もつけたらよい。家の前にお花もあつたらよいなど製作品の発展的な計画も生まれるだろう。これから作るものは何か。オオカミの太い尻尾、豚の面、リンゴの木、果物籠、その他、これからの楽しい計画が次々出来る。明日の仕事を話合つて子供の要求する材料を教師は準備することを考へる。
4. 既習の音楽リズムによつて、気軽に歌つたり踊つたりしながら自由遊びえ流れていく。
- (7) 自由あそび (11:20~11:30) (略)
- (8) 中食 (11:30~12:30) (略)
- (9) リクレーション (12:30~1:00)
よい音楽のレコード鑑賞をしたり、子供達が作つたお話を発表し合つたり、教師の童話を聴いたりして、食後静かにして遊ぶ。
- (10) 自由あそび (1:00~2:00)
団体遊び(ボール遊び、陣取り、ロンドン橋、其他)をしたり棒登棒を心ゆくまで高く昇つたり、大いに力一杯運動的な遊びをしているうちに、グループ遊びも楽しく、うまく身についていくであろう。
- (11) 歸り仕度 (2:00~2:15) (略)
- (12) 歸宅 (2:15~2:30)
今日の遊びの反省と明日来てする仕事の計画や遊びの相談をする。門まで見送つて帰す。教師は明日展開される子供の遊びを予想して、材料を豊かにそろえて準備をする。

(下線は筆者にて作成・文中表記は原文のままとした)

のプログラム」には、受講生らの研究を基礎として考えられた幼稚園、保育所、小学校1年生の一日のプログラムが提示された。その中から、幼稚園のプログラムを取り上げ、表5に示した。遊びを中心とした生活の中に、おやつや昼食の時間、「リクレーション」の時間などを組み入れて、子どもにふさわしい一日の生活が立案されている⁽⁴²⁾。

ここでは、遊びは「自由あそび」と「仕事」の2つの側面から考えられており、一日の生活の中心に据えられているのは、「仕事」と称して行われる遊びの方である。「自由あそび」は子ども自身で好きなグループをつくり、好きな遊びを選び取って行う「自発活動」として考えられ、一方の「仕事」は昨日の遊びにつながる話し合いや遊びの目的の共有、役割分担を伴ったグループ活動、遊びの振り返りなどの目的活動を位置づけたものである。幼年教育班では、子どもの「興味は経験の糸口」であると考えられ、幼年教育の目標を達成していくには、その興味及び「社会の要求や文化的条件」などを考慮して、「整理された経験」が与えられなければならないとした。ただし、「形式的な単元」を設けて経験を与えることは望ましくないとし、子どもの連続的な日々の生活の中に望ましいと考えられる種々の経験が組み込まれていくようなカリキュラムの構築を目指したのである⁽⁴³⁾。なお、カリキュラムに関する研究の成果として、幼稚園等における「一日のプログラム」が同研究集録に掲載されたのは、幼稚園における子どもの「生活全体がカリキュラム」⁽⁴⁴⁾であるとする受講生らのカリキュラム観に依拠したものであり、一日の生活を子どもに即して構築することをカリキュラム編成の出発点として考えたためである。

5. IFELの示唆した幼稚園カリキュラム開発

以上に述べてきた幼稚園教育班・幼年教育班の研究が、戦後日本の幼稚園カリキュラムの開発にどのような示唆を与えたのかを以下にまとめたい。なお、カリキュラムに関する研究の成果として提示された経験内容及び幼稚園における「一日のプログラム」については、1948年3月に文部省より刊行された「保育要領」と比較して、その特質について論じたい。

幼稚園教育班・幼年教育班における研究は、第1に、お茶の水女子大学附属幼稚園における幼児の観察に基づいて、わが国の子どもの発達のアウトラインを指し示すとともに、各幼稚園における子どもの発達の状況や興味・要求に沿ったカリキュラムをつくる上での実証的・実践的な研究方法を提示するものであった。

第2に、幼稚園及び保育所における幼児から小学校低学年の児童までの教育を一貫した幼年教育カリキュラムの開発を示唆した。幼年教育カリキュラムの開発は、幼児期から児童前期へ移行する子どもの発達の連続性及び「保護」と「教育」とが一体となった子どもの生活の樹立という立場から示された知見であった。なお、この研究班において進められた幼年教育に関する研究は、主として、幼年教育を担う「教師の養成」に焦点が当てられ、幼年教育のカリキュラムに関しては、経験

内容及び「一日のプログラム」の節において、小学校低学年の児童への言及がなされるに留まっている。

第3に、民主的な社会の形成へと向かう日本の子どもに必要な目標及びその目標の達成へと向かう経験内容を提示するとともに、それらをいかに組織してカリキュラムをつくるのかを提示した。経験内容は子どもの興味や発達の特徴を出発点として考えられ、子どもの生活と密接に関わる生活経験として、日々の生活の中に織り込まれていくものであることが強調された。なお、この生活における様々な興味や要求を重んじ、その拠り所を子どもの生活に置くという考え方は、1948年3月に刊行された「保育要領」においても同様の趣旨が示されている。「保育要領」の編纂にあたったのは、倉橋惣三・坂元彦太郎・山下俊郎ら、「幼児教育内容調査委員会」委員であり、その委員会の運営に強い影響を与えたのが、当時の連合軍最高司令部民間情報局教育部顧問ヘレン・ヘファナン(H. Heffernan)であった。「保育要領」では、教育の目標を達成していく際の出発点となるのは「子供の興味や要求」であり、その通路となるのは「子供の現実の生活」であるとして、子どもの興味や要求から発するような、また、日常の生活の中で出くわすような様々な具体的経験を保育内容とした。その保育内容は、「楽しい幼児の経験」という副題のもと、「見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画、製作、自然観察、ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、健康保育、年中行事」の12項目より提示された⁽⁴⁵⁾。IFELの示唆した幼稚園カリキュラムは、「保育要領」にも据えられている経験主義・経験カリキュラムの考え方を底流とし、子どもの生活に立脚した経験内容をカリキュラムへと組織していこうとするものであった。

第4に、グループによる目的活動を中心に据えた一日のプログラムを提示した。なお、この目的活動を中心とした生活の構築が、「自由遊び」を基調とした「保育要領」の趣旨とは相違するものであることに筆者は着目した。「保育要領」では、「幼稚園における幼児の生活は自由な遊びを主とするから、一日を特定の作業や活動の時間に細かく分けて、日課を決めることは望ましくないとし、「幼稚園の日課」は自由遊びを基盤として組立てられるべきであるとした⁽⁴⁶⁾。その理由は、「保育要領」の根底に据えられた教育観と指導観に依拠して考えられる。「保育要領」は、「幼児の心身の生長発達に即して、幼児自身の中にあるいろいろのよき芽生えが自然に伸びていくのでなければならない」という「まえがき」に記された文章に表されているように、幼児自らの内にもっている成長する力を信じ、それが成長発達していく道筋に沿って教育を行うという「合自然性」の教育観を底流とした。ゆえに、幼児の内に充つものの表現としての自発的な遊びを極めて重んじ、その遊びを豊かに誘う、幼児の「生長発達に適した環境」とそこでの「活動を誘い促し助け」る教師の誘導という特徴的な2つの指導観を据えた⁽⁴⁷⁾。「保育要領」では、教師の教育的意図を込めた環境に幼児が主体的に関わり、そこで生み出される幼児の自発的な遊びをより豊かに「誘い促し助け」る教師の誘導を介在させて、

教育の目標を達成していこうとする教育方法が採られた。幼児の自発的な遊びが最大限に発揮される場として、「自由遊び」を位置づけたのである。

「保育要領」はアメリカの経験主義の影響を受けたものであったに留まらず、戦前日本の幼児教育関係者らが研鑽を積み重ねてきた「明治以来の実践や研究の集大成」として評価されるに至った文書である⁽⁴⁸⁾。ゆえに、戦前のわが国における児童中心主義・自由主義の幼児教育観より影響を受けた「保育要領」には、その編纂に携わった倉橋の「誘導保育」論に代表されるように、幼児の自発的な遊びに信を置いた「合自然性」の教育観と環境による教育の意図を反映させた指導観が据えられたのである。なお、倉橋が説いているように、幼児の自発的な遊びは、流れゆく一日の子どもの生活を壊さず、自然な形で遊びへと入り込んでいくことができるような生活形態によって最大限に引き出されるものであると考えられた。この子どもの流れゆく連続的な一日の生活をいかに構築していくのかを保育の根本的な問題として問うた「保育要領」の趣旨は、アメリカの経験主義・経験カリキュラムの考え方を底流とした IFEL の幼稚園教育班・幼年教育班の研究には反映され得なかったのではないだろうか。

6. おわりに

戦後日本の幼稚園カリキュラムをめぐっては、「保育要領」の趣旨を解して実践し難かった実践の場の実情や当時の小学校で盛んに開発されたコア・カリキュラムの考え方を適用した幼稚園カリキュラムの創出とその拡大という一つの傾向が指摘されてきた。そのような中、IFEL の幼稚園教育班・幼年教育班の提示したカリキュラムに関する研究は、各幼稚園の子どもの実態を科学的・客観的な視点を加えて理解し、その子どもの発達と生活に立脚した独自性のあるカリキュラムをつくる上での知見を提示した。ただし、IFEL 受講生らによる研究の成果が、その後の各幼稚園におけるカリキュラムに関する研究にいかんにか反映され、その結果、どのようなカリキュラムが開発されていったのか、また、「自由遊び」がいかにカリキュラムに組織されていったのかについては疑問として残されるところである。この点は、本研究に残された今後の課題としたい。

引用・参考文献

- (1) 文部省『教育指導者講習小史』学芸図書株式会社, 1953, pp. 6-19.
- (2) 高橋寛人『占領期教育指導者講習(IFEL)基本資料集成 第I巻』すずさわ書店, 1999, pp. 26-28.
- (3) 高橋寛人「占領下日本における教師教育改革と教育学教員再教育」『横浜市立大学論叢 人文科学系列』45(2), 横浜市立大学学術研究会, 1994, pp. 113-138.
- (4) 平田宗史・平田トシ子「教育指導者講習会(IFEL)の基礎的・調査研究(一):教育序説」『福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編』44, 福岡教育大学, 1995, pp. 177-195.
- (5) 坂口京子「教育指導者講習(IFEL)に見る経験主義国語教育の特質」『国語科教育』49, 全国大学国語教育学会, 2001, pp. 33-40.
- (6) 柴静子「占領期の日本における家庭科教育の成立と展開(XIII)―IFELの概要と受講者の評価を中心に―」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』50, 広島大学大学院教育学研究科, 2001, pp. 341-350.
- (7) 大岡紀理子「「教育指導者講習会」における幼年教育班についての一考察―1950年及び1951年のカリキュラム研究を中心に」『学術研究 教育学・生涯教育学・初等教育学編』59, 早稲田大学教育学部, 2010, pp. 87-101.
- (8) 大岡紀理子「戦後教育改革期における幼稚園教員の再教育に関する一考察:「教育指導者講習会」の「幼年教育の行政, 管理及び組織」を中心に」『早稲田教育評論』26(1), 早稲田大学教育総合研究所, 2012, pp. 125-140.
- (9) 後藤正矢「戦後教育改革期 IFEL における幼稚園教員養成改革の構想」『未来の保育と教育:東京未来大学実習サポートセンター紀要』4, 東京未来大学実習サポートセンター, 2017, pp. 21-30.
- (10) 前掲(7), p. 100.
- (11) 第5期 IFEL 幼稚園教育班『幼稚園教育研究集録』お茶の水女子大学附属幼稚園所蔵, 1950, pp. 1-82.
- (12) 同上, pp. 81-82.
- (13) Bi-Weekly Report of IFEL Activities, “Childhood Education” 25 Sep. 1950 - 7 Oct. 1950, CIE, 5610(12), 国立国会図書館憲政資料室所蔵.
- (14) 前掲(11), p. 6
- (15) 同上.
- (16) 前掲(13).
- (17) 前掲(11), pp. 3-5.
- (18) 前掲(11), pp. 6-7.
- (19) Bi-Weekly Report of IFEL Activities, “Childhood Education” 23 Oct. 1950 - 2 Nov. 1950, CIE, 5755(1).
- (20) 前掲(11), pp. 13-49.
- (21) 前掲(11), pp. 13-19.
- (22) 前掲(11), pp. 19-25.
- (23) 前掲(11), pp. 25-39.
- (24) 前掲(11), pp. 39-49.
- (25) 前掲(11), pp. 70-75.
- (26) 第6期 IFEL 幼年教育班『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』文部省, 1951, pp. 260-261.
- (27) 菊池ふじの「アイフェル六回生が到達した結論」『幼年教育 No2』IFEL 幼年教育研究会, 国民図書刊行会, 1952, pp. 17-18.
- (28) Bi-Weekly Report of IFEL Activities, “Childhood Education” 19-30 Mar. 1951, CIE, 5611(6).
- (29) 前掲(27), p. 17.

- (30) 同上
- (31) Bi-Weekly Report of IFEL Activities, “Childhood Education” 5-16 Mar. 1951, CIE, 5611(5).
- (32) 前掲(26), pp. 1-262.
- (33) 前掲(26), pp. 1-2.
- (34) 前掲(26), pp. 2-21.
- (35) 前掲(26), pp. 23-25.
- (36) 前掲(26), pp. 253-259.
- (37) Bi-Weekly Report of IFEL Activities, “Childhood Education” 22 Jan. 1951 - 2 Feb, CIE, 5611(2).
- (38) 前掲(26), pp. 45-62.
- (39) 前掲(26), pp. 57-58.
- (40) 前掲(26), p. 57.
- (41) 前掲(26), p. 62.
- (42) 前掲(26), p. 63-66.
- (43) 前掲(26), p. 62.
- (44) 前掲(26), p. 25.
- (45) 文部省「保育要領—幼児教育の手びき—」『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979, pp. 534-536.
- (46) 同上, p. 551.
- (47) 前掲(45), p. 535.
- (48) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979, p. 331.

図版

- 表1 文部省「昭和25年度教育指導者講習修了者名簿」高橋寛人編『占領期教育指導者講習（IFEL）基本資料集成 第Ⅲ巻』すずさわ書店, 1999, pp. 247-248.
- 表2 文部省「昭和26年度教育指導者講習修了者名簿」高橋寛人編『占領期教育指導者講習（IFEL）基本資料集成 第Ⅲ巻』すずさわ書店, 1999, pp. 286-287.
- 表3 第6期IFEL幼年教育班『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』文部省, 1951, pp. 57-58.
- 表4 第6期IFEL幼年教育班『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』文部省, 1951, p. 57.
- 表5 第6期IFEL幼年教育班『第六回 教育指導者講習研究集録 IX 幼児教育』文部省, 1951, pp. 63-66.

付記

本研究の一部は、日本教育学会第78回大会において口頭発表している。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、お茶の水女子大学附属幼稚園副園長上坂元絵里先生には、貴重な資料の閲覧を快くお引き受けいただきました。心より御礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費JP19K02635の助成を受けたものです。